平成 25 年度大学院派遣研修研究報告書

派遣者番号	24J01	氏　名	加藤　賢一
研究主題 ―副主題―	算数科における反省的思考を促す学習指導に関する研究 ―「暗示」に焦点をあてた授業づくりとその分析―		
所属校	中央区立佃島小学校	派遣先	山梨大学大学院

項　目	内　容
Ⅰ　研究の目的	算数科の問題解決学習は、「問題把握→自力解決→集団検討→まとめ」という過程で行われることが多い。しかし、これはあくまで指導者側の授業の捉え方であり、児童一人一人の思考の様相とは一致していない。重要なことは、授業の型ではなく、一人一人の理解の状況に応じた学習指導を行うことである。こうした問題解決の指導を行うことによって、児童が自ら問題を見付け、考え、解決したことを更に生かす能力と態度を育成することを狙っている。その際、重要となるのは、反省的思考の育成であると考える。その理由として、児童が自ら問題を見つけ、自ら考え、解決したことを更に生かす力を身に付けていくためには、「自らの活動を振り返り、自ら学習を進める力」の育成が必要であるからである。 反省的思考について、代表的な研究者として挙げられるのが、J.デューイである。デューイは「思考の方法」の中で、反省的思考の五つの局面を述べている。その中で極めて重要な役割を果たしているのが「暗示」である。「暗示」は、問題解決の至る場面で生起し、その後の活動に大きな影響を与えるからである。 本研究の目的は、算数科の問題解決における「暗示」の役割と機能を明確にするとともに、反省的思考を促す学習指導を構築し、その有効性を示すことである。
Ⅱ　研究の方法	上述の目的を達成するために、反省的思考の考察、「暗示」の機能と役割に関する考察、並びに反省的思考を促す学習指導の構築は、文献解釈による理論的検討を研究方法とし、学習指導の有効性の検討については、授業のプロトコル、学習感想、事後のインタビュー調査の分析による実証的検討を主たる研究方法とした。
Ⅲ　研究の結果	本研究の成果は、次のようにまとめられる。 （１）これまでの算数科における問題解決過程の枠組みを再考し、反省的思考を加味した算数科における問題解決の思考過程の枠組みを作成するとともに、本研究における反省的思考の捉え方を明らかにした。

	（２）反省的思考を促す上で重要な「暗示」に焦点をあて、「暗示」の特徴や役割を明らかにした。 （３）算数科における反省的思考を促す学習指導を実現するための教材研究例を示した。 （４）算数科における反省的思考を促す学習指導の中で、「暗示」に焦点を当てた授業づくりを行う際の観点を明確にした。 （５）授業を通して、算数科における反省的思考を促す学習指導の可能性、有効性を例証した。
Ⅳ　考察	本研究は、算数科の問題解決における「暗示」の役割と機能を明確にするとともに、反省的思考を促す学習指導を構築し、その有効性を示すことが目的であった。上記の結果より、実践を通して、例証した。特に、児童の思考の出発点である「暗示」に焦点をあてることによって、教材分析を詳細に行い、思考の様相を図に示すことで、授業の展開を予想し適切な指導・支援を可能であることを示すことができた。また、反省的思考というのは、そのとき、考えたものに対してだけ反省するのではなく、反省によって次のものを生み出していくところが実践から見られ、反省的思考を育成する価値を見いだすことができた。 しかし、本研究には更に検討されるべきいくつかの重要な課題が残されている。 「暗示」以外の側面に焦点をあてて研究を進めることによって、反省的思考を促す学習指導がどのように深まっていくのか、また、どのような関連性があるのかを考察することが、第１の課題である。 今回は小学校第５学年を対象に行ったが、更に学年を広げることや、分析に必要なデータ量を増やすこと、また、データの収集方法についての検討が第２の課題である。